

にて覆はれて居る故に植物のミクロテクニクを借用すると大變よく連續切片を作ることが出来る。即ちアルコールを徐々にあげクロ、ホルム—パラフィンを用ひて三、四日或は一週間もかゝつて埋没するのである。

小鮎の横斷、小鮎もやはりBOUIN'S mixtureの如き平凡なもので固定しacid-alcohol に三日乃至七日間浸して脱灰し徐々にアルコールをあげて脱水す。純アルコールには少くとも二日位入れ途中で一度とりかへた方がよい。パラフィンには大抵三日乃至五日頃入れる。

トータルセクションの場合には一般に厚い切片を作るがパラフィンは融點の高いものがよい。室温 22°C 位でも 58—60°C 位の融點のパラフィンを用ひた方がよい。若し切片がリボンとならない時は 48—56°C 位の融點のパラフィンをパラフィンブロックの周圍に塗りつけて切ればよい。

日本産食蟲椿象に就て

進 士 織 平

キマダラサシガメ

福井教授が雑誌昆蟲第一號以來の誌上で御發表になつた日本産食蟲椿象科圖説に少々補足させて戴きます。

氏のアルバイト否、私の知つて居る範圍では新記録と覺ゆるものに *Myria zebra* STÅL. があります。之は宮崎縣都城市と吉松との約中間驛なる飯野驛から、北方約三里なるフランス山の發電所附近の路傍なる松の枝稍で採つたものです。黒褐色の腹部には横に黄帶があるからキマダラサシガメと言ふ和名を付けました。

マダラカモドキサシガメ *Ploiariola hirayamai* FUKUI.

之は九州地方特に私が三ヶ年間滞在して居た都城附近には極めて普通の椿象です。冬期は幼蟲の有様で越冬するらしく、五月の大清潔施行當日に庭の隅に置いてあつた炭俵の下などに、一分許りの幼蟲數個づつ見ることがありました。七月上旬頃から、多數室内に侵入して來て蚊を捕食しました。縣立都城中學校の宿直室では、夕刻八時頃から十一時頃までの間に十四、五匹も採つた事があります。蚊帳の内部に電燈を入れて置くと、此の椿象が蚊帳の外部へ澤山來る蚊を捕食する有様がよく觀察されました。一匹の椿象が二時間足らずの間に六匹から八匹位殆んど自體と同じ位の蚊を食ふと云ふと、少しく語弊が伴ふかも知れませんが、實際の所は肢脚で蚊を捕へて置いて、次で腹部の環節間膜の所から口吻を挿入して蚊體の血液を吸ふのです。